

ミュケナイ時代の宗教(1)

— 線文字 B 粘土板文書を中心に —

山 川 廣 司

はじめに

筆者は、以前、ミュケナイ時代におけるポセイドーン崇拝やポトニア崇拝について検討し、両者とも大地と深く結びついた大地神であったが、ポセイドーン崇拝は小アジア方面より伝播した豊饒祈願祭祀であったのに対し、ポトニア崇拝は自然崇拝に起源をもち、クレタからギリシア本土に伝わった大地母女神であったこと、またこのように豊饒をもたらす大地母女神として先住民クレタ人（ミノア人）から伝えられたポトニア女神はミュケナイ時代においてポセイドーンと並んで広く崇拝されていたことを確認した。

そしてここ数年来「四国遍路と世界の巡礼」を課題とする共同研究に参加し、古代ギリシアにおけるアスクレピオス崇拝をとりあげ、古代ギリシア人の心性の一側面について考えてきた²⁾。エピダウロスにおけるアスクレピオス崇拝は紀元前5～4世紀に隆盛期を迎えるが、その直接の起源は暗黒時代に出現した半神祭祀（Hero-Cult）にあるとされている。しかもそのような半神祭祀は、紀元前2000年頃にバルカン半島に侵入してきたギリシア人によってもたらされたゼウスを主神とするオリュンポス信仰に先立つ、先住ギリシア人たちの民衆信仰にまで遡る可能性もある。このようにエーゲ文明期から前古典期に至るまで、ギリシア人の宗教も政治や社会の動向に影響されながら紆余曲折を辿るのであるが、その様な変遷の中でミュケナイ・ギリシア人の宗教はどのように捉

えられるであろうか。

筆者は、線文字B粘土板文書の分析を通して描かれるピュロス王国の宗教活動や考古学の発掘によって明らかとなった王国内の聖域や王宮内の聖所や印章、テラコッタ製の偶像など宗教に関わると思われる遺構・遺物から、ミュケナイ人がクレタ島に進出してミノア文明を受容していく過程で、地母神崇拝を中心とする宗教がどのようにしてミュケナイの宗教と繋がっていくかのプロセスについて考察することを目指しているが、本稿では線文字B粘土板文書を手がかりに、ピュロス王国の宗教活動について考えてみたい。

1. 線文字B粘土板文書にみえるピュロス王国の宗教儀式

ここではミュケナイ時代の王国の1つであったピュロス王国から出土の線文字B粘土板文書³⁾を利用して、王国内で王権を中心に行われていた宗教活動について見てみる。

a) Tn 316

〈表面〉

.1 po-ro-wi-to-jo ,

.2 { i-je-to-qe , pa-ki-ja-si , do-ra-qe , pe-re , po-re-na-qe

.3 pu-ro { a-ke , po-ti-ni-ja AUR*215^{VAS} 1 MUL 1

.4 ma-na-sa , AUR*213^{VAS} 1 MUL 1 po-si-da-e-ja AUR*213^{VAS} 1 MUL 1

.5 ti-ri-se-ro-e , AUR*216^{VAS} 1 do-po-da AUR*215^{VAS} 1

.6 *vacat*

.7-.10 pu-ro *vacant*

ミュケナイ時代の宗教(1)

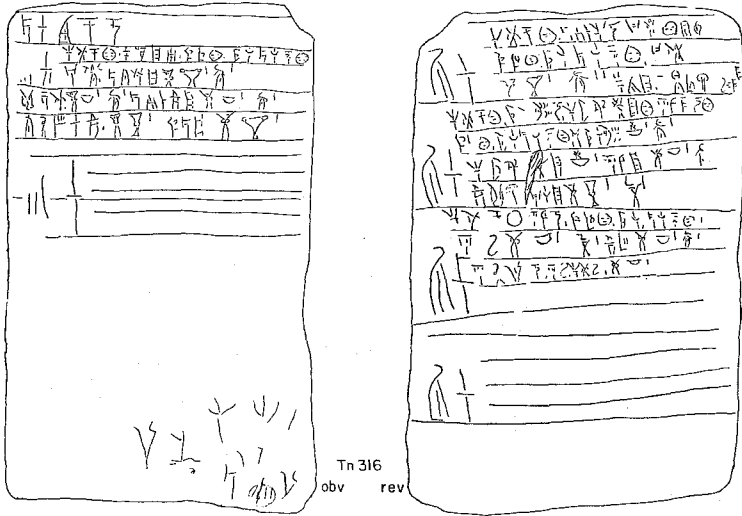
〈裏面〉

v. 1	}	i-je-to-qe, po-si-da-i-jo, a-ke-qe, wa-tu
v. 2		do-ra-qe, pe-re, po-re-na-qe, a-ke
v. 3		
pu-ro		-ja AUR *215 ^{VAS} 1 MUL 2 qo-wi-ja, na-[] , ko-ma-we-te-
v. 4	}	i-je-to-qe, pe-re-*82-jo, i-pe-me-de-ja-qe di-u-ja-jo-qe, ,
v. 5		do-ra-qe, pe-re-po-re-na-qe, a, ,
v. 6		pe-re-*82 AUR *213 ^{VAS} 1 MUL 1
v. 6		i-pe-me-de-ja, AUR *213 ^{VAS} 1 di-u-ja AUR *213 ^{VAS} 1 MUL 1
v. 7 pu-ro		e-ma-a ₂ , a-re-ja AUR *216 ^{VAS} 1 VIR 1
v. 8		i-je-to-qe, di-u-jo, do-ra-qe, pe-re, po-re-na-qe a-ke
v. 9		di-wi AUR *213 ^{VAS} 1 VIR 1 e-ra AUR *213 ^{VAS} 1 MUL 1
v. 10		di-ri-mi-jo di-wo, i-je-we, AUR *213 ^{VAS} 1 [] vacat
v. 11 pu-ro		vacat
v. 12-v. 16 pu-ro		vacant

この文書は、ピュロス王国の宗教の性格を示す両面記載の重要な文書であるが、まず表面では、左端に大きな文字で2箇所(ピュロス(Pu-ro))と書かれ、1行目で「航海の月? (Plowistos) に⁴⁾と挙行時期が明記される。2行目でピュロス王国の重要な宗教聖地であったスパギアーネス Sphagianes 地区で、ピュロス(当局)が宗教儀式を執り行い、贈物を運び、犠牲を連れてきたことを記し、以下にそれらの献納受領者名が列記される。3行目でポトニア女神に、黄金製の杯1個、婦人1名を、4行目で母なる女神? (Manassa)⁵⁾に黄金製の鉢1個、婦人1名を、ポシダエイア (Posidaeia) 女神⁶⁾に、黄金製の鉢1個、婦人1名、5行目で氏族の父祖たち (Tris-heroi)⁷⁾に黄金製の杯1個を、家の守り神 (House-Lord)⁸⁾に黄金製の杯1個を献納したことが列挙され、以下空白となっている。

次に裏面では、文書は左側にそれぞれ大きくピュロスと書かれた4つのゲル

図 1



出典：E. L. Bennett, Jr. ed., *The Pylos Tablets Texts of the Inscriptions found 1939-1954*, Princeton UP, 1954, p. 36

ープに分けられ、4番目は空白となっている。第1グループ(1~3行目)はポセイドンの聖域においてピュロス(当局)⁹⁾が宗教儀式を執り行い、都市が先導し、ピュロス(当局)が贈物を運び、犠牲を連れてきたことを記し、G^wowia (Boia牛?)¹⁰⁾女神やKomawenteia(長い髪の女神あるいはKo-ma-we(地名)?)女神に黄金製の杯1個、婦人2名を献納している。第2グループ(4-7行目)では、ピュロス(当局)がペルセー(Perse)女神¹¹⁾の聖域、イピメデア(Iphimedeia)女神¹²⁾の聖域およびデイヴィア(Diwia)女神¹³⁾の聖域において、贈物を運び、犠牲を連れてきたことを記し、以下ペルセー女神に黄金製の鉢1個、婦人1名を、イピメデア女神に黄金製の鉢1個を、デイヴィア女神に黄金製の鉢1個、婦人1名を、ヘルメス神(Hermes Areias)に黄金製の杯1個、男性1名を献納している。第3グループ(8-11行目)では、ピュロス(当局)がゼウスの聖域で宗教儀式を執り行い、贈物を運び、犠牲を連れてきたことを記し、ゼウスに黄金製の鉢1個、男性1名を、ヘラに黄金製の鉢

1個、婦人1名を、ゼウスの息子ドリミオス (Drimios)¹⁴⁾ に黄金製の鉢 [x] 個の献納が記され、以下は空白になっている。

この文書では、オリュンポスの神々としてゼウス、ヘラ、ヘルメースら3柱の神が確認できるのみで、その他はミュケナイ時代の地母神として重要であったポトニア女神やここでしか記載されていない“母なる女神”，ポセイドーンの女性形であるポシダエシア女神，地位としてはそれほど高くはなかったと思われる氏族の父祖たち，家の守り神などで，我々にとってあまり馴染みのない神々の名前が列挙される。

同様のことは裏面でも見られる。第1グループでは，ポセイドーン神の聖域において挙行された宗教儀式で，恐らく女神名と思われる Boia および Komawenteia への献納が記録されるが，ポセイドーンへの献納の言及はない。第2グループでは，バルセー，イピメデア，ディヴィアの3柱の女神の聖域での宗教儀式に言及しているが，献納を受ける神は，イピメデア，ディヴィアとヘルメス (Hermes Areias) で，必ずしも聖域名と一致しない。順序通りだとしたら，聖域名とは別の神への献納が行われたということになる。第3グループでは，ゼウス神の聖域において挙行された宗教儀式で，ゼウスとヘラ，ゼウスの息子ドリミオスが列挙され，ゼウス神の家族への献納を記録している。このように裏面においても，オリュンポスの神々とは範疇を異にする神々が献納を受けている。

この文書は，宗教儀式における3グループの神々への献納リストであるが，その名前の多くは馴染みが薄く，後のゼウスを主神とするギリシアの神々とは異なる範疇のように思われる。またポトニアをはじめ女神名が圧倒的に多い。このことから，ミノア人らギリシア先住民の地母神崇拜がミュケナイ・ギリシア人に受け継がれ，インド・ヨーロッパ起源の彼ら自身の信仰システムと併存していたものと思われる。すなわちホメロスでは，ゼウスを主神とし，先住民に起源を持つ女神ヘラが妻としてゼウスに従属するといったオリュンポスの12神の体系が示されているが，ミュケナイ時代は，先住民の地母神崇拜とギリシア人が持ち込んだゼウスを主神とする父系神崇拜といった2つの宗教が混

在し、王権により両者の神々に対して宗教儀式が挙行されていたといえる¹⁵⁾

また、この文書で注目すべき点として、po-re-na の語の解釈の問題がある。文書には総計 13 個の黄金の器と 10 人が列挙されていることから、ヴェントリス・チャドウィック¹⁶⁾ は当初は器を運ぶ (phorenai) 者との解釈も示していたが、器と人間の数が合わないことから、人身御供にされるため儀式に連れてこられた人であるとの考えを示している。さらにチャドウィック¹⁷⁾ は、この文書の解釈については大いに議論が分かれるところであるが、贈物 (献納品) の運送と po-re-na の連行について述べた何らかの宗教儀式を表すものとし、po-re-na という意味不明の語は人間を意味し、しかも生贄にされるため連行された者であり、それは新たに発見されたテーベ出土の粘土板 Of 26 でも確認できるとしている。さらにミュケナイ時代の墳墓の外側から発見された人骨例から、これは人身御供が行われたとの解釈を示し、物的証拠としては疑問の余地がないわけではないが、またホメロスや悲劇作品の記述からも補強できるとしている。そしてこの粘土板を人身御供の記録との解釈が正しいとするなら、人間を生贄にすることが定期的な宗教行事であったとは考えられないし、いかに富裕な王でも、13 個もの黄金製の器を奉納することが毎年の恒例であったとも考えられないとし、この祭儀が極めて特殊な状況において行われたものだったことを指摘している。

また R. キャッスルデン¹⁸⁾ も、この文書を人間犠牲の記録とし、彼らは集団をなし、食糧や衣服を与えられ、それぞれの聖域でいつでも利用できる状態におかれていたが、その供給源は奴隷、戦争捕虜、急襲・拉致によって連れてこられた一般人、家族に課せられた一種の租税義務として供出された者などを想定し、ピュロスでもテーベでも確認できるこのような人身御供は危機への対処として制度化され、一連の行政上の手続きの一部となっていたとしている。しかし、キャッスルデンが言うように、宗教儀式において動物犠牲はともかく、このような人間犠牲がある程度制度的に行われていたかについては慎重でなければならない。むしろ筆者は、この大型の粘土板は、図 1 のように空白部分が多く、しかも大急ぎで書かれたらしく、文字の脱落や判読不明の箇所もあり、

また筆跡も乱れていることなどの文書の状態から、何らかの事情で急遽作成された文書であったと判断する。すなわちチャドウィック¹⁹⁾が言うように、極めて特殊な状況下で行われた臨時的行事と考えた方がよいと思われる。この解釈が正しいとすれば、筆者が従来から主張している当時のピュロス王国が緊急事態下にあったことを証明する資料となる。

b) Un 2

1. pa-ki-ja-si , mu-jo-me-no , e-pi , wa-na-ka-te,
2. a-pi-e-qe , o-pi-te-<u>-ke-e-u
3. HORD 16 T 4 CYP+PA T 1 v 3 o. v 5
4. FAR 1 T 2 OLIV 3 T 2 *132 S 2 ME S 1
5. NI 1 BOS 1 OVIS^m 26 OVIS^f 6 CAP^m 2 CAP^f 2
6. SUS+SI 1 SUS^f 6 VIN 20 S 1 *146 2

この文書は、王宮近郊の聖地スパギアーネス地区²⁰⁾でのポセイドーン崇拝の例祭、王の宗教上の入信式あるいは新王即位の記録と解釈できる文書²¹⁾であるが、祭儀の次第が記録されているわけではなく、奉納品として用いられた物品の目録が記されているに過ぎない。1行目で举行場所と王の入信式という目的が述べられ、2行目で武器具管理者？(teukhea-overseer)²²⁾が献納者として記載され、3行目以下で、大麦 1574.4 l、カヤツリ草(キュペロス) 14.4 l (但し 8 l 不足)、小麦粉 115.2 l、オリーブ油 307.2 l、*132(不明の物品) 19.2 l、蜂蜜 9.6 l、イチジク 96 l、牡牛 1 頭、牡羊 26 匹、牝羊 6 匹、牡山羊 2 匹、牝山羊 2 匹、肥った食用豚 1 頭、雌豚 6 頭、ワイン 585.5 l、*146 (布?) 2 が列挙されている。しかも奉納の品々の量はかなりのもので、チャドウィックの算定²³⁾によれば、大麦の献納量は 43 人の 1 ヶ月分の配給量に相当する。

この文書も献納品目や献納量から推測して、季節に行われた例祭と言うよりは、王の入信式あるいは即位式といった特別な事例と考えた方がよい。王国に

とつての最も重要な行事には、大量の品目が気前よく神に献納され、祈願の成就を図ったと思われる。

c) Un 718

- .1 sa-ra-pe-da , po-se-da-o-ni , do-so-mo
- .2 o-wi-de-ta-i , do-so-mo , to-so , e-ke-ra₂-wo
- .3 do-se , GRA 4 VIN 3 BOS^m 1
- .4 tu-ro₂ , TURO₂ 10 ko-wo , *153 1
- .5 me-ri-to , v 3
- .6 vacat
- .7 o-da-a₂ , da-mo , GRA 2 VIN 2
- .8 OVIS^m 2 TURO₂ 5 a-re-ro , AREPA v 2 *153 1
- .9 to-so-de , ra-wa-ke-ta , do-se ,
- .10 OVIS^m 2 me-re-u-ro , FAR T 6
- .11 { a -ma
VIN S 2 o-da-a₂ , wo-ro-ki-jo-ne-jo , ka-
- .12 GRA T 6 VIN S 1 TURO₂ 5 me-ri[
- .13 vacat [] 1 v 1

『オデュッセイア』第3巻冒頭 (*Od.*, III, 1-13, 43) で、父オデュッセウスの消息を求めてイタケーからやって来た息子テーレマコス一行がピュロスに到着した時、ピュロス王ネストールをはじめ戦士たちが、海岸で“大地を揺るがすポセイドーン神”に80頭以上の漆黒の牡牛を生贄に捧げている場面があるが、この粘土板文書でもポセイドーンへの献納 (*dosmos*, *δοσμός*) がずば抜けて多く、王国内で最も主要な神であったことを示している。献納者は4人列記されている。1行目で王領地 (*Sarapeda*)²⁴⁾ でのポセイドーンへの献納と記され、2行目で、第1の献納者で王国の高位者であるエンケリアーヴォーン (*E-ke-ra₂-wo*) が犠牲を行う祭司? (*o-wi-de-ta-i*)²⁵⁾ に以下の数量の献納を行って

いるとし、3～5行目で小麦384ℓ、ワイン86.4ℓ、牡牛1頭、チーズ10(単位)、子羊の皮1枚、蜂蜜4.8ℓを列挙している。

第2の献納者は共同体(ダーモス, da-mo)で、小麦192ℓ、ワイン57.6ℓ、牡羊2匹、チーズ5(単位)、軟膏3.2ℓ、羊皮1枚を献納している。第3の献納者は王(wanax)に次ぐ地位にある民衆指導者(lāwāgetās)で、牡羊2匹、小麦粉57.6ℓ、ワイン19.2ℓを献納し、第4の献納者は宗教集団(Worgiones, ὄργεῶνες)のカマ(ka-ma)²⁶⁾で、小麦57.6ℓ、ワイン9.6ℓ、チーズ5(単位)、蜂蜜9.6ℓを献納している。

この文書はピュロス王国の最上位階層の土地所有を示す土地文書Er 312との対応関係で注目される。最初の奉納者エンケリアーヴォーン²⁷⁾は、Er 880ではSarapedaに樹木が植えられた広大な土地を保有し、それは王のテメノスの3倍以上の広さであり、An 610では船の漕ぎ手40人を抱えていることなどから王との推測もある。第3の献納者の民衆指導者は、Er 312では王に次いで第2順位で私有地テメノス(王の1/3の10単位=約24 ha)を所有している。第2の献納者の共同体(dāmos)は、Er 312のテレスタイ(telestai)に対応している。チャドウィック²⁸⁾によれば、e-to-ni-jo(神のための私有地)と主張する女祭司エリタに対して公有地を管理する共同体がその保有権を主張するという土地保有形態を巡る争いを記すEp 704文書の予備調査資料(Eb 297)では、共同体の代わりに区画地保有者(ko-to-no-o-ko)となっていることから、共同体の声を代表して述べるのがテレスタイ(大土地保有者)であったとし、dāmos, telestai, ktoinookhosの3語は同義語であることは確かとしている。そして第4の貢献者である宗教集団はEr 312では荒蕪地所有者として4番目に記載されている。このように、ピュロス王国の最上層階級の者たちが挙ってポセイドン神に種々の献納を行っており、高位権力者とポセイドン神への宗教儀式との関わりを示している。

以下では非常に断片的であるが、神々への香油の献納文書(Fr-シリーズ)を見ていく。それらの文書は、祭りの名前、月名、地名、香油受納神の名前な

ど重複しながら大きく4つに分類できる。

(1) 祭りの名前

d) Fr 343

{ .a e-ti-we,
{ po-]se-da-o-ne re-ke-to-ro-te-ri-jo OLE[

「寝椅子の敷き延べ祭 (Iekhestroterion)」²⁹⁾ に際してポセイドーンに e-ti (植物名?) で香り付けされたオリーブ油 [x] l を献納している。

この文書では、献納者名も、祭りに使用されたと思われる香り付けした植物名も、献納量もわからないが、ポセイドーンへの香油の献納が記録されている。Fr 1217でも、「寝椅子の敷き延べ祭」に際して、スパギアーネス (聖域) に、セージで香り付けされた塗油のためのオリーブ油を 1.6 l を献納している。Fr 1202では、「新酒の祭り (me-tu-wo ne-wo)」³⁰⁾ に際して神々の母 (Mātēr theiā) に、セージの香り付けがされたオリーブ油 160 l を献納している。また Fr 1215では、「2柱の女神の祭り」(wa-na-se-wi-jo)³¹⁾ に際して王 (神の敬称)³²⁾ に塗油のためのオリーブ油を献納し、Fr 1222では、「玉座保持の祭り」(to-no-e-ke-te-ri-jo, thorno-(h)ekhterion)³³⁾ に際して、2柱の女王 (wa-na-so-i) にセージの香りが付けられたオリーブ油 1.6 l を献納している。その他 Fr 1231では、「宴席 (Xenwion) の月」³⁴⁾ にボトニアと Dipsia 女神にオリーブ油 9.6 l を献納している。このように祭りに際して、宗教行事に使用するため特別な香り付けがされた香油が神々に献納されているが、その貢納量は極端に少ない。

(2) 月 名

e) Fr 1218

- .1 e-ra₃-wo[]we-ja-re-pe , po-ro[-wi-to
- .2 di-pi-si-je-wi-jo OLE + A S 1
- .3-6 vacant

ここでは「航海の月 (po-ro-wi-to)」に、Dipsia 女神³⁵⁾ に塗油のためのオリーブ油 9.6 l を献納していることが記されている。Fr 1221 では、同じく「航海の月」に王女神 (Wanassa) にアーモンドで香り付けされたオリーブ油 9.6 l を献納し、Fr 1232 でも「航海の月」に Dipsia 女神にセージで香り付けされたオリーブ油 9.6 l を献納している。このように「航海の月」に香油の献納が集中していることは、春の航海が始まる季節に安全を祈願する祭りが相次いで開催されていたのであろう。

Fr 1224 では、「Pakijanios の月」³⁶⁾ に、ポセイドーンにセージと e-ti-で香り付けされたオリーブ油 0.8 l を献納している。恐らく宗教の中心地として重要であったスパギアーネスは、定期的で大規模な祭礼 (大祭) が行われたことが広く知られており、それに因んで開催月に名前を付けたと思われる。

(3) 地 名

f) Fr 1209+1211

pa-ki-ja[-]na-de e-ti-we OLE v[

ここではスパギアーネス地区 (聖域) に e-ti-で香り付けされた香油 [x] l を献納している。前出の Fr 1217 でも「寝椅子の敷き延べ祭」の際に塗油用にセージで香り付けされたオリーブ油 1.6 l が、Fr 1233 でもオリーブ油 1.6 l が同地区に献納されており、これらは宗教儀式のための香油が献納された記録で、ここでも宗教の中心地であったスパギアーネスの宗教上の重要性を窺い知ることができる。その他 Fr 1223 では場所の特定はできないが、Ti-no (Thinós) に塗油用のセージの香り付けされたオリーブ油が 19.2 l, 塗油用のバラの香り付けされたオリーブ油が 0.8 l 献納され、Fr 1230 でも地名と思われる Pi-jo (Phia) にアーモンド香の油 1.6 l が献納されている。これらの地域にスパギアーネス同様、宗教儀式用の香油が献納されていることから、宗教儀式が行われる地方の聖域があった場所とみることができる。

また Fr 1216 では、スパギアーネスの神々にセージで香り付けされたオリーブ油 32 l が献納されている。ここで注目されるのは、この地の複数の神への

献納が記載されていることから、スパギアーネス地区はピュロス王国の重要な聖域であると同時に、この聖域内には複数の神の聖所があったことである。しかもチャドウィック³⁷⁾によれば、ここは王宮のすぐ北、現代のコーラ Khora の町の近辺にあり、ここでミュケナイ時代の墳墓が発見されており、後代でも宗教祭儀の行われる場所であったという事実から、ミュケナイ社会崩壊後もなお宗教の中心地であったという。スパギアーネス地区は当時は王国最大の聖地としてポセイドンやポトニアらの国家神をはじめ、二次的階位の神々や地方神などの聖所を擁する一大宗教センターであったと思われる。

g) Fr 1220

- .1 ro-u-si-jo , a-ko-ro , pa-ko-we OLE + PA v 4
- .2 di-pa-si-jo-i , wa-na-ka-te OLE + PA S 1

1行目で Ro-u-so の領域にセージの香り付けをしたオリーブ油 6.4ℓ、2行目で Dipsia 女神と王（神）にセージの香り付けをしたオリーブ油 9.6ℓを献納している。また Fr 1226 でも同じく Ro-u-so の領域の2柱の神々にセージの香り付けがされたオリーブ油 4.8ℓを献納している。これはピュロス近州主要9地区の1つであった Ro-u-so 地区にも聖域があり、宗教儀式が行われていたことを示している。

(4) 香油受納の神名

まず最初にピュロス王国において最も重要な神の1人であったポセイドンについてみる。

h) Fr 1224

- { .a pa-ko-we , e-ti-we
- { pa-ki-ja-ni-jo-jo , me-no , po-se-da-o-ne OLE + PA Z 2

「Pakijanios の月」に、ポセイドンにセージと e-ti-で香り付けされたオリーブ油 0.8ℓを献納しているが、その極端に少ない量からしてこれは宗教儀式用

の特別の油であったと思われる。Fr 1219 では2柱の女神 (*wanasoim*) とポセイドーンにアーモンド香のオリーブ油 3.2ℓ を献納しているが、Fr-文書に関する限りポセイドーンへの献納は少ない。

次にポセイドーンと並んで重要な女神ポトニアについてみる。

i) Fr 1206

Po-ti-ni-ja , a-si-wi-ja , to-so , qe-te-jo OLE + PA 5 v4

ここではアジアのポトニアへオリーブ油 150.4ℓ を献納³⁸⁾ しているが、注目すべきはアジア (*aswia*) と形容辞を伴って地域が限定されていることである。チャドウィック³⁹⁾ によれば、ポトニアは印欧語起源であるが、青銅器時代を通してギリシア先住民の地母神崇拜がエーゲ海世界全体の宗教生活を支配するようになったことは疑う余地がなく、神の名前も様々に変化しながら古典期まで続いたのであり、ポトニアこそこの地母神のミュケナイ時代の名前であったとしている。従ってポトニアが地母神の総称であるとしたなら、各地にそれぞれの地母神が存在していたであり、そのために形容辞でポトニアの特定を行ったのであろう。そして香油の献納量は Fr 1202 の神々の母に匹敵する量で、ずば抜けて多かった。

その他、Fr 1225 では、U-po のポトニアに衣服用の軟膏状のアーモンド香のオリーブ油 9.6ℓ が献納されているが、Fr 1236 では、スバギアーネスの領域内でその U-po⁴⁰⁾ のポトニアにオリーブ油 11.2ℓ が献納されている。U-po が地名を示すのか、それともポトニアの属性を示すのかはわからないが、宗教の中心地であったスバギアーネスの聖域内に U-po のポトニアの聖所が置かれていたかもしれない。Fr 1231 では「宴席の月」にポトニアと *Dipsia* 女神に、Fr 1235 では1行目で2柱の女神 (*wa-na-so-i*) と王 (神) に、2行目で2柱の女神とポトニアにそれぞれセージで香り付けされたオリーブ油 28.8ℓ , 4.8ℓ の献納が行われている。

最後に文書に記載されたそれ以外の神々について試みる。

j) Fr 1204

ti-ri-se-ro-e wo-do-we OLE Z 1

儀式が挙行された時期は記されていないが、Tn 316 の表面で黄金製の杯の献納を受けた氏族の祖先神 (Tris-heros) に、バラの香り付けされたオリーブ油 0.4 ℓ を献納している。

k) Fr 1205

a-pi-qo-ro-i we-ja-re-pe OLE + PA S 2 v 4

2 柱の A-pi-qo-ro (Amphiquoloi, 侍女たち)⁴¹⁾ に、塗油のためのオリーブ油 25.6 ℓ を献納している。A-pi-qo-ro は、Ad 640 では侍女として王宮で働く労働者のグループとして記載されているが、ここではそのような人間の集団というよりは大女神に仕える下位の侍女神の称号と見た方がいい⁴²⁾ Fr 1240 でも Dipsia 女神の侍女たち (e-qo-me-[]) ⁴³⁾ にセージの香り付けされたオリーブ油 1.6 ℓ を献納している。これも Dipsia 女神に仕える人間の侍女たちの意味にも取れるが、献納受領者ということからすれば同様に下位の侍女神と考えたい。

ま と め

馬場恵二氏の近著⁴⁴⁾ によれば、ミノア文明期「旧宮殿時代」(2000~1700 年 BC) に創設された「山頂聖所」(Peak-Sanctuary)⁴⁵⁾ は「新宮殿時代」(1700~1400 BC) に至っても王権との関わり of 緊密性を保ち、既存の「民間信仰」の聖所に王権が便乗してその権力下に「山頂聖所」を整備し、宮殿都市と聖所とを結ぶ「巡礼路」を築くが、そもそも「山頂聖所」の出現が旧宮殿時代と重なるのは偶然ではないとし、それに先行する初期青銅器時代末期 (2300 年 BC 頃) に従来の穀物生産、牧畜に加えてオリーブ栽培農業がクレタ島に根付き、農業生産力の飛躍的進展がみられ、このような経済発展に支えられ、クレタ島

東部地域において集落形態が変化して「都市化」の傾向が見られた。穀物栽培とオリーブ栽培を2本柱とした農業生産の上昇的安定は、畜産の分野をも刺激して牧人たちの家畜増産への意欲を高め、また農業経済の変容は山間を生産活動の場とする牧人たちにも、羊毛・チーズに対する需要の高まりに応ずる利益追求の機会を与え、そのような恵まれた経済環境が彼らの「現世利益」追求の意欲を一層かき立て、それとともに家畜増殖の成功を身近な神靈に祈願する風習が彼らの生活環境の中から自然発生的に生まれたのではないかと推測し、そのような牧人社会から周囲に広まって一般農民まで呑み込む勢いにあった「山頂聖所」の盛況を、クノツソスやファイストス、マリアなどの「宮殿都市」を営んだ王権がそのまま民間に放置しておくはずがなく、平癒祈願や報謝の奉納儀礼に伴ったであろう豪勢な寄進奉納という形の財政収入の狙いもこめてその公権力を「山頂聖所」にも拡張し、その結果、「山頂聖所」の敷地が整備され、石垣で区画され、その境内に祭壇や祭儀室という恒久的施設が設けられるに至ったとしている。そして15世紀半ばBC頃にギリシア人がクレタ島に進出して、クノツソス宮殿にギリシア王権を樹立するが、クレタ島でミノア系からギリシア系への政権移動という政変は島内各地方に翳りをもたらし、「山頂聖所」が急速に衰退したため、同時代のギリシア本土では、ミュケナイ時代(1600年頃～12世紀BC)と呼ばれる繁栄の時代を迎えたにもかかわらず、「山頂聖所」に相当する遺跡の確認はないとする。

長々と馬場氏の論述を引用したが、詳細な現地調査に基づいて描かれるミノア文明期からミュケナイ文明への民間信仰と王権の関わりは注目に値する。そして今回筆者が分析したミュケナイ時代最末期の線文字B粘土板文書から得られる情報と重ね合わせたとき、ミュケナイ時代の宗教についての一面を描くことができるのではないだろうか。

献納に関わる宗教文書から得られたことをまとめれば、まず第1に、受納者はポトニアをはじめ圧倒的に女性神が多いことである。これは前述のようにギリシア先住民の地母神崇拜が依然として残存しており、むしろ王権が宗教儀式を率先して行い、権力の強化に活用していたのではないかと思われる。第2に

これらの文書に現れる女性神の多くは、我々にとっては馴染みが薄い名前であり、しかもゼウスを主神とする印欧語系ギリシア人のオリュンポス神体系とは範疇を異にする地母神崇拜に起源を持つと思われる。ここではギリシア人の父系神崇拜と先住ギリシア人の地母神崇拜の2つの宗教が混在し、しかも王権は両者の神々に対して宗教儀式を挙行していたと思われる。第3に季節毎に行われる恒例化した例祭儀式などにおいては王がそれらの儀式を統括していた。また王の即位など国家的な大行事や緊急事態に直面した場合などには、臨時的に祈願成就を願って大量の献納品が捧げられており、その際動物犠牲はいうに及ばず人間犠牲さえ行われていたと思われる。ピュロス王国の場合、この文書が記録された数ヶ月後に王国は崩壊するのであり、Tn 316 文書はそのような緊急事態下の状況を如実に物語っている。第4に、王国の宗教中心地であったスパギアーネス地区は、聖域であると同時に複数の神々を祀る聖所でもあり、王国最大の聖域としてポセイドンやポトニアらの国家神を祀ると同時に、下位の神々や地方神などの聖所を擁する一大宗教センターであったと思われる。ここでの下位の神や地方神は恐らく先住ギリシア人から続く土着の信仰が基になったもので、政治権力の交替が神の地位の変更を引き起こしたのであろう。第5に、Fr 文書にみられるように、バラやセージなどの植物で香り付けがなされた宗教儀式用のオリーブ油は献納量も少量である一方、Un 2 文書のように300ℓ以上の献納も記されており、宗教儀式に際して実に多様にオリーブ油が利用されていたことを示している。

以上から、線文字B文書に描かれるミュケナイ時代の宗教は、王権が王国内の儀式宗教を主導することで権力維持をはかる機能を果たしており、またそれは、民間信仰を権力強化のために利用したミノア王権に取って替わったミュケナイ王権が、自ら持ち込んだ宗教にミノア宗教を取り込みながらミュケナイ宗教を確立していく過程を示すものと推測することができる。

次にもう一つのアプローチとして考古学の発掘などによる成果からミュケナイ時代の宗教をみななければならないが、紙面が尽きたので稿を改めて論じたい。

注

- 1) 拙著, 「ピュロス王国におけるポセイドーン崇拝」『鉤路論集』第10号, 1978年, 35-51頁; 拙著, 「ミケーネギリシアにおけるポトニア崇拝」『鉤路論集』第11号, 1979年, 41-59頁
- 2) 拙著, 「古代ギリシアのエピダウロス巡礼—アスクレピオスの医療祭儀—」『愛媛大学「四国遍路と世界の巡礼」国際シンポジウム』プロシーディングズ, 2004年, 18-25頁
- 3) 本稿では, M. Ventris & J. Chadwick, *Documents in Mycenaean Greek*, Cambridge, 1973² (以後 *Docs.* と略記) および Emmett L. Bennett, Jr., and Jean-Pierre Olivier, *THE PYLOS TABLETS TRANSCRIBED*, Roma, 1973 を使用する。
- 4) J. Chadwick, *The Mycenaean World*, Cambridge, 1976, p. 90 (以後 *Chadwick 1976* と略記) は暦月の名称を属格で示すことは宗教文書ではよく見られることとし, Plowistos の月はパーマーによれば「航海の月」で, 冬の間航海を控えていたギリシア人が3月末になると航海を再開したことから, 現代の暦上では3月末頃に当たるであろうとしている。; L. P. Palmer, *The Interpretation of Mycenaean Greek Texts*, Oxford, 1963, pp. 262-263.
- 5) Monique Gérard-Rousseau, *Les Mentions Religieuses dans les Tablettes Mycéniennes*, Roma, 1968, pp. 136-137 はかなり重要な女神であったと指摘している。
- 6) *Chadwick 1976*, p. 94 は古典期には知られていない女神であるが, Poseidon の女性形 Posidaeia であるとしている。
- 7) M. Gérard-Rousseau *op. cit.*, pp. 222-224; J. L. Davis ed., *Sandy Pylos—An Archaeological History from Nestor to Navarino—*, The University of Texas Press, 1998, p. 112.; *Chadwick 1976*, p. 94 は, 古典期には tris (3つ) と hērōs の複合形は知られていないが, hērōs は後代のギリシア語で半神 (demi-gods) あるいは地方神 (local deities) としてよく用いられたと指摘している。
- 8) Lydia Baumbach, *Studies in Mycenaean Inscriptions and Dialect 1965-1978*, Roma, 1986, p. 308 (以後 *Baumbach 2* と略記) は後のギリシア語の despotes, dompotes などの諸説を列挙しているが, *Chadwick 1976*, p. 95 も主人を意味するギリシア語の方言形とも考えられるが, 確かなことは全くわからないとしている。
- 9) *Chadwick 1976*, p. 95 は, これは地名ではなく, 首都ピュロスの近郊にあった建造物が聖域を指すとしている。
- 10) *Docs.*, p. 463 は, G*owia は古典ギリシア語では Boía と表記され, Botái と呼ばれる女性の名前あるいは町の名前とし, それは地方神に因んだものとしている。*Chadwick 1976*, p. 95 は「牛の眼をした」という形容辞は, ホメロスでは通常はヘラあるいは他の女神, 女性

- たちに用いられたとし、侮辱の意味合いはないとしている。その他諸学者の解釈については Lydia Baumbach, *Studies in Mycenaean Inscriptions and Dialect 1953-1964*, Roma, 1968, p. 225 (以後 *Baumbach 1* と略記), *Baumbach 2*, p. 356, M. Gérard-Rousseau, *op. cit.*, pp. 135-136 など参照されたい。
- 11) *Docs.*, p. 463 は*82 の音価を swa とし, Preswa といった名前を想定し, オケアノスの娘やヘリオスの妻の名前ベルセー (Perse, Πέρση) を連想している。Chadwick 1976, p. 95 は, その名前を漠然とではあるが, ハーデースの妻ベルセポネー Persephone の名前の前半部分と復元している。
- 12) Chadwick 1976, p. 95 は *Od. XI*, 305 でアローエウスの妻でありながらポセイドーンと交わり, 2 人の子供を産んだ Iphimedeia から, 伝説上の人物として知られている彼女がピュロスでは女神として崇拝されていたことに驚いている。; M. Gérard-Rousseau, *op. cit.*, pp. 116-118.
- 13) *Docs.*, p. 540 は di-wi-jo (diwion, shirine of Zeus or place name) の女性形で, 女神の名前 (Diwias) としている。; Chadwick 1976, p. 95 はゼウスと対をなす恐らく天空の女神であったとしている。; *Baumbach 2*, p. 307 では「ゼウスの妻」とあり, そうだとすればヘラのことになるのだろうか。
- 14) Chadwick 1976, p. 96 は, この文書にしか記載されていない名前であるが, i-je-we (hiewei) を息子と解釈することが正しいとすれば, まだ知られていない神が存在していたことになるとし, 語の綴りを補い i-je-re-u とすれば, 祭司 (priest) と読める可能性もあるが, 他の受領者が全て神なので, ここでは神と解釈する方が自然であるとしている。
- 15) Rodney Castleden, *Mycenaean*, Routledge, 2005, p. 141.
- 16) *Docs.*, p. 461.
- 17) Chadwick 1976, 91-92.
- 18) Castleden, *op. cit.*, p. 157.
- 19) Chadwick 1976, p. 89-90.
- 20) この地名は Jn 829 においてピュロス近州主要 9 地区の 1 つとして記されているが, Chadwick 1976, p. 45 は, Pa-ki-ja-ne は王宮があった地区で, 重要な宗教の中心地であったとし, 後代において聖地の名声が王宮から北に僅か 3 km 程離れた Khóra 郊外の Volimídhia にあったミュケナイ時代の墳墓に一致されることは重要であるとし, 関連性を示唆している。
- 21) *Docs.*, pp. 440-441, 562; *Baumbach 1*, p. 192; Chadwick 1976, pp. 100-101; Castleden, *op. cit.*, p. 160.
- 22) Thomas G. Palaima, Aegean Feasting A Minoan Perspective, *Hesperia* 73, 2004, p. 242. 特

- に n. 125 の諸説参照。
- 23) *Chadwick 1976*, pp. 100-101.
- 24) *Margareta Lindgren, The People of Pylos I-II*, Uppsala, 1973, p. 153 はこの語が個人名、地名の可能性は低いとし、sa-ra/ro を王宮周辺の特別の地域と解釈し、Sara-pedo/a は一種の王宮のテメノス (royal temene, royal land) としている。
- 25) *Baumbach 2*, p. 343 では owidetas dat. pl. として犠牲を行う祭司, owidetas として羊の皮剥人という宗教役人? 等の解釈を紹介している。; *Docs.*, p. 458.
- 26) *Docs.*, p. 261; *Chadwick 1976*, p. 113 は正確な意味はわからないが、比較的広い土地を有するある種の特異な土地保有形態を指し、その土地所有者には高位者も含まれており、何らかの任務を遂行する義務を負っていたとしている。
- 27) *Baumbach 2*, p. 310 は王とする説と王ではないとする説を紹介している。; *Docs.*, pp. 265-6; *Chadwick 1976*, p. 71.
- 28) *Chadwick 1976*, p. 77.
- 29) *Chadwick 1976*, p. 97 は、かつてはポセイドーンの名前と関連づけて「聖なる結婚」と解釈されたが、これは神々の像を寝椅子に並べ、それらに食物が供えられた神々の宴祭に言及している可能性を示唆している。
- 30) *Palmer, op. cit.*, p. 248; *Docs.*, p. 480 は場所である可能性も示唆している。
- 31) *Docs.*, p. 479; *Baumbach 1*, p. 248 では、Wanasseion という地名、地名に由来する部族名、月名、祭りの名 (Wanassa) などの諸説が列挙されている。
- 32) *Chadwick 1976*, p. 97 は、この王 wa-na-ke-te を神に対する敬称として用いられた可能性を指摘しているが、「ポセイドーン王」とのホメロスの用法と結び付けてポセイドーン神と推測することは軽率であるとしている。
- 33) *Palmer, op. cit.*, p. 459 は $\sigma\tau\omicron\lambda\omicron\upsilon\text{-}\epsilon\gamma\epsilon\sigma\tau\eta\rho\acute{\iota}\omega\upsilon\varsigma$ と解し、「悲嘆の月」としている。その他の解釈については *Baumbach 1*, p. 241 を参照。
- 34) *Docs.*, pp. 477-478 は、ke-se-ni-wi-jo を客人 (xenwion) と解し、客人への贈与品の形をとってポトニアに献納されたとしている。; *ibid.*, p. 254 は祭りの名前とし、Xenia (Banquet) 祭に際してと解釈している。諸説については *Baumbach 1*, p. 177 を参照。
- 35) *Docs.*, pp. 479, 540 は意味不明としながらも、香油の受納者としたなら、飢渴に苦しみ、飲物を求める死者 (dipsioihi) あるいは大地の女神 Dipsia の祭司、テッサリアの月名 Dipsios との解釈を紹介しているが、香油で飢えは癒されないとし、女神に因んだ地名か祭りの名前としている。
- 36) *Docs.*, p. 568 は、この月名は大祭が行われた地名に由来すると解説している。
- 37) *Chadwick 1976*, pp. 90-91.

- 38) *Docs.*, p. 577; M. Gerard-Rousseau, *op. cit.*, pp. 196-7.
- 39) *Chadwick 1976*, pp. 92-93.
- 40) Baumbach 1, p. 245.
- 41) Palmer, *op. cit.*, pp. 248-9, 408 は与格の双数として、献納受給者としている。
- 42) *Docs.*, p. 480. 一方 *Chadwick 1976*, p. 97 は神々に随行する下級の神との解釈もあるが、むしろ祭司として神に仕える人間のことでありとしている。そして献納受給者として神名だけではなく、Fr 1209+1211 や Fr 1233 のように宗教の中心地であったスバギアーネスの地名もあるので、その可能性も否定できないとしている。
- 43) Baumbach 1, p. 161 はこの語を Dipsia 女神崇拜での侍女たち *heq^oomenoii* (dat. pl.), 'to the followers (attendants)')、2 番絞りの油, di-pi-si-jo のために取っておかれた油などの解釈を列挙している。
- 44) 馬場恵二、『癒しの民間信仰—ギリシアの古代と現代—』東洋書林, 2006 年, 20-31 頁。
- 45) Castleden, *op. cit.*, pp. 141-143.